

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 25 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14251

研究課題名（和文）小学生，中学生，高校生が感じる学習の価値およびその形成要因

研究課題名（英文）The Perceived Utility Value of Subject and Its Shaping Factors for Children

研究代表者

三和 秀平（MIWA, SHUHEI）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：70824952

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，子どもが各教科に対して感じる価値を把握し，価値の形成にかかわる要因を明らかにすることを旨とした。子どもが学習に対して感じる価値は教科や年齢によって異なることが明らかとなった。具体的には，数学，国語，理科，社会に対する実践的利用価値は学年が向上するにつれて低下するが，英語は中学校で価値の認知が高くなるなど異なる傾向が見られた。また，教科間の相関について，数学と国語のような距離の遠い科目の興味の相関は学年が上がると低い値になるが，利用価値については学年が上がっても中程度の相関を維持していた。また，利用価値を高めるための介入の効果により価値の向上につながる可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では，各教科に対して子どもたちがどのように感じているのかをデータをもとに示した。近年では学習を通して「何ができるようになるのか」を明確化することが重要視されているが，価値を理解しやすい/理解が難しい科目を学年の違いにも着目しながら明らかにした。子どもの教科に対する考え方をデータとして示すことで，学習指導にも役立てることができる。また価値を高めるための介入の効果についても検証した。有用性を考える介入を実践することで，子どもたちの動機づけの向上に寄与できると思われる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to understand the utility value that children perceive for each subject and to clarify the factors affecting the shaping of that value. It was found that the value that children perceive for learning differs depending on the subject and school age. Specifically, the practical utility value of mathematics, Japanese, science, and social studies decreased as the grade level increased, while the perceived value of English increased in junior high school. Regarding the correlation between subjects, the correlation of interest in far-distant subjects such as mathematics and Japanese became lower as the grade level increased, but the correlation of utility value remained moderate even as the grade increased. The results also indicated the possibility that the effectiveness of interventions to increase the utility value could lead to an increase in value.

研究分野：教育心理学

キーワード：利用価値 課題価値 動機づけ 教科 利用価値介入 興味 変化 価値形成

## 1. 研究開始当初の背景

中央教育審議会(2016)が挙げている学習指導要領の改訂のポイントとして、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」がある。この中で、「何ができるようになるのか」を明確化することが重要視され、全ての教科等を、「知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理している。教師には、このような学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出ししていくことが求められている。しかし、急速に社会が変化する現代において、実際に子どもたちが学ぶことにどのような価値を感じているのかは十分に明らかではない。

近年では、教育心理学における学習動機づけ研究の文脈で、学習の価値を感じた動機づけが学習者にポジティブな影響を与えることが示されている。例えば、自己決定理論(Deci & Ryan, 2002)に基づいた研究では“将来に役立つから”などの項目を含む、学習内容に価値を感じ自律的に学習に取り組む“同一化的調整”が、適切な学習行動や学校適応を予測することが示されている(西村他, 2011)。また、課題価値理論(Eccles & Wigfield, 1985)に基づいた研究では課題に関して価値を感じることは、学習への取り組みや持続、さらには「主体的・対話的で深い学び」とも関連することが明らかになっている。このように、学習に対して価値を感じることは学習者にとって重要であることが示されている。しかし、これらの研究は主に“役立つと思うか”等といった質問に対して得点をつけて評価させる質問紙調査で実施されており、具体的に学習者が各教科にどのような価値を感じているのかは十分に考慮されていないため、どのような価値を感じているのかという点をより掘り下げて検討する必要があるだろう。

上記を踏まえ、今後様々な教育政策を進めるにあたって、まずは子どもたちの学習に対する考え方やそのような考え方に影響する要因を整理する必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)子どもたちが各教科に感じる具体的な価値の内容について明らかにすること、(2)価値の形成に関わる要因について明らかにすること、(3)上記に関して、発達段階や教科ごとの違いにも着目して検討することの3点である。

本研究では、現代の子どもたちが感じている学習の価値について整理する。これまでも、学習の価値に関する研究が行われてきたが、従来の研究は理数科教育に関する研究が中心であったり、理論的な背景に乏しかったり、特定の発達段階のみを対象としたりするものが多かった。また、近年では急速な社会の変化に伴い新たな職業が誕生したり、従来あった職業がなくなったりしている。このような社会の変化により、近年の子どもたちの学習に対する考え方は以前と異なっていることが考えられる。そこで本研究では、多くの研究で参考とされている課題価値理論(Eccles & Wigfield, 1985)を参考に、現代の子どもが感じる学習の価値を発達段階や教科による違いも考慮して検討を行う。例えば、エリクソンの理論では青年期の課題として「同一性 vs 同一性拡散」を挙げている。青年期は児童期とは異なり「自分は何がしたいのか」に悩み、学業を自己実現と関連づけて考える。それに伴い、学業への考え方も変化していきだろう。また、近年注目されている深い学びに関して、各教科の固有性や本質を視野に入れより質の高い学びを目指すことが必要となっている。そのような、教科による違いも考慮する必要がある。

加えて、学習の価値を形成する過程には、親の教育方針や教師の働きかけ、夢や進路選択等の学習者本人の経験が関連することが想定される。これまでの研究では子どもの感じる価値と各変数(親や教師の要因)との相関的な関連を示したものはみられるが、時系列的な形成のプロセスに言及したものはみられない。本研究ではどのような要因が子どもの適応的な価値の形成に影響するのか、どのような過程を通して価値を形成していくのかを発達段階ごとに、質的および量的な側面からより詳細に検討する。そして、子どもの価値形成における有効な働きかけを考える。

## 3. 研究の方法

(1)小学生、中学生、高校生を対象として、各教科(算数、国語、理科、社会、英語)を勉強することで「日常や将来にどのように役立つと思うか」について自由記述で回答を求めた。

(2)小学生、中学生、高校生を対象として、面接により教科へ感じる価値や価値を形成する要因について尋ねた。

(3)小学生、中学生、高校生を対象として、質問紙調査により教科への価値や形成に関連する要因について回答を求めた。

## 4. 研究成果

目的(1)【子どもたちが各教科に感じる具体的な価値の内容について明らかにすること】について、面接調査や自由記述の分析より子どもが教科に対して感じる価値を分析した。自由記述での回答をカテゴリに分けると、算数は計算(出現数: 186)、買い物(74)、お金の扱い(34)、将来への使用(17)などに、国語は漢字理解(92)、人との交流(39)、文章の作成(36)、言葉

遣い(35), 敬語の使用(25)などに, 理科は実験的思考(29), 災害の理解(21), 人とのかわり(15), 科学者になる(12), 生活での知識(11)などに, 社会は歴史理解(36), 今の理解(25), 人物の理解(24), 昔から学ぶ(21), 世界の理解(19)などに, 英語は外国人とのかわり(137), 外国とのかわり(96), 英語でのコミュニケーション(34), 旅行(27), 道を聞かれたとき(21)などに, それぞれ役立つという回答が得られた。また, 理科や社会については未記入が目立ち有用性を考えることが困難である可能性も示唆された。

目的(2)【価値の形成に関わる要因について明らかにすること】について, 面接調査においては保護者の接し方が価値の形成に関連しているような発話が得られた。一方で, 質問紙調査で保護者の考え方と子どもの教科への価値について関連を検討したが, 特徴的な相関関係はみられなかった。また, 有用性を考えるような介入(Hulleman & Harackiewicz, 2021)については効果がみられた。

目的(3)【発達段階や教科ごとの違いにも着目して検討すること】について, 実践的利用価値では, 英語のみ中学校で高くなる傾向がみられたが, 他の教科では学年が上がるにつれて低下する傾向がみられた。制度的利用価値では, 英語では学年が上がるにつれて高くなる傾向がみられたが, 理科と社会では学年が上がると低下していた。興味では数学と英語を除き学年が上がるにつれて低下する傾向がみられた(Figure 1)。加えて, 教科間の相関係数をみていくと数学 理科のような距離が近い科目の興味は学年が上がっても一定の相関係数を保っているが, 数学 国語のような距離が遠い科目では学年が上がると相関係数が低くなる傾向がみられた。しかしながら, 利用価値については相関係数が低下する傾向がみられたが, 中学生以降でも中程度の相関係数を保っていた。

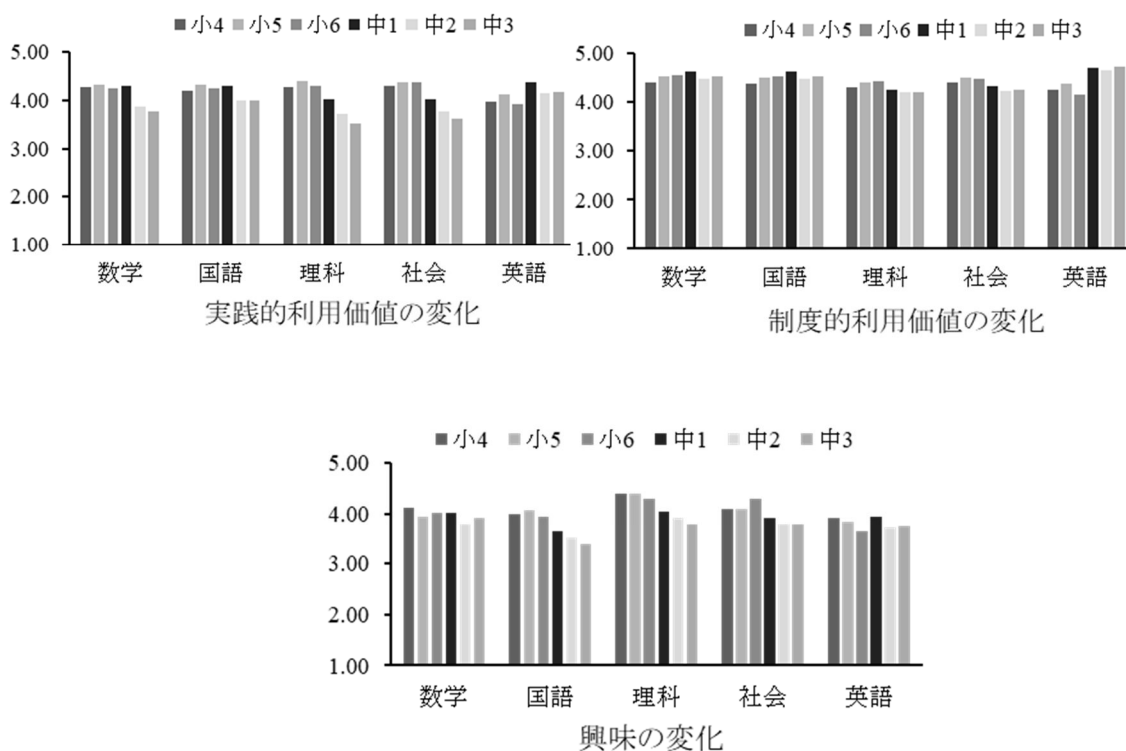


Figure 1 各教科の価値の得点

#### 引用文献

中央教育審議会 (2016). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (Eds.). (2002). Handbook of self-determination research. University of Rochester Press.

Eccles, J. S., & Wigfield, A. (1985). Teacher expectancies and student motivation. In J.B. Dusek (Ed.), Teacher expectancies (pp. 185—226). Lawrence Erlbaum Associates

Hulleman, C. S., & Harackiewicz, J. M. (2021). The utility-value intervention. In G. M. Walton & A. J. Crum (Eds.), Handbook of wise interventions: How social psychology can help people change (pp. 100—125). The Guilford Press.

西村多久磨・櫻井茂男 (2013). 小中学生における学習動機づけの構造的変化 心理学研究, 83, 546-55. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.83.546>

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三和 秀平, 解良 優基, 松本(朝倉) 理恵, 濱野 裕希	4. 巻 70
2. 論文標題 小中学生の領域レベルにおける動機づけの変化と分化 利用価値と興味に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 260 ~ 275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/jjep.70.260	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三和 秀平	4. 巻 44
2. 論文標題 小学生の感じる各教科の有用性 どのように役立つと思うかについての自由記述の分析から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 島田 英昭・三和 秀平	4. 巻 49
2. 論文標題 動機づけ理論からみたオンライン学習の継続性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コンピュータ & エデュケーション	6. 最初と最後の頁 27 - 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Miwa Shuhei, Jitoshō Risa, Aoyama Takumi, Mukai Hidefumi, Akamatsu Daisuke	4. 巻 43
2. 論文標題 Implicit preferences and language performance: using a paper-and-pencil Implicit Association Test to predict English engagement and performance	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 7183 ~ 7192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12144-023-04906-5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三和秀平・解良優基	4. 巻 95
2. 論文標題 日本語版Expectancy-Value-Cost Scaleの作成	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 三和秀平, 解良 優基
2. 発表標題 教職課程の学生を対象にした利用価値介入－事例の分析を通じた介入の効果－
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三和 秀平, 解良 優基, 松本(朝倉) 理恵, 浜野 祐希
2. 発表標題 小中学生の教科間の動機づけの関連の変化－利用価値と興味に着目して－
3. 学会等名 日本教育心理学会第 63 回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三和秀平
2. 発表標題 小学生が感じる各教科の有用性
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三和秀平
2. 発表標題 教育学部の学生が道徳に対して認知する利用価値
3. 学会等名 日本教科教育学会第46回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三和秀平
2. 発表標題 高校生が感じる各教科の有用性
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関